

タイ華僑崇聖大学の存立基盤 —社会奉仕の精神とタイ王室の庇護—

牧 貴愛*

The Founding of Huachiew Chalermprakiet University in Thailand:
A Spirit of Social Service and Thai Royal Benevolence

Takayoshi MAKI*

ABSTRACT

Despite the history of oppression of Chinese schools in the past and a solid national education system in Thailand, Huachiew Chalermprakiet University—the first and steadily operating Chinese-oriented higher education institution in Thailand—was successfully established by an overseas Chinese foundation. This study aims to clarify the enabling conditions for the establishment and continuous operation of the university by reviewing previous researches on Chinese schools and the overseas Chinese foundation in Thailand. The results of interviews with stakeholders of both the university and the foundation were analyzed. Findings show that there is a strong psychological bond, which embeds the continuous mutual relationship (bunkhun) between the overseas Chinese people's spirit of service with gratitude and indebtedness to the Thai society and the Thai royal benevolence.

キーワード： タイ、 華僑崇聖大学、 華僑報徳善堂

1. はじめに—タイ教育の「剛」と「柔」—

タイは、東南アジアで唯一植民地となることなく、独立を保った国である。その巧みな外交手腕は「竹の外交」¹と評された。また、タイの高等教育の発展を丁寧に取り、西洋モデルと伝統モデルが見事に融合していると捉えたワトソンは「タイ人は『優秀な文化借用者』である」²と形容した。このことは、昨今のタイにおける学校教育の取り組みにも顕著に見出すことができる。たとえば、英語を教授言語とするイングリッシュ・プログラムと呼ばれる特別教育課程が開設されている学校が全国に200校強ある。このプログラムでは、子ども達は、タイ語、タイ文化に関わる内容を除く、全ての教科（学習内容グループ³）を、外国人教員から、英語で書かれた教科書を用いて学ぶ⁴。また、科学技術人材の育成を目指すSTEM教育や、アセアン共同体の一員である意識を高めるアセアンネス教育の取り組みなどがある⁵。さらに「タイランド4.0」という将来ビジョンの下で、高齢化の進展による労働力人口の減少を見据えた上で、少数精鋭の高度専門職によるイノベーション主導型の経済社会を目指しており、日本の国立高等専門学校（KOSEN）の教育モデルの導入、運用も始まっている⁶。

他方で、たとえば、タイの道德教育の取り組みを見ると「善き市民としての義務」といっ

*大学教育センター非常勤講師

た流行の市民性教育をおさえつつも、仏教を中核に据えた教育活動も継続的に行われていたり、「国王を元首とする民主主義」の支持が盛り込まれていたりする⁷。こうしたタイの学校教育の不易の諸側面を挙げると、毎朝行われる朝礼において国旗掲揚、国歌斉唱、三帰依文を唱えることや王室・仏教関連の数々の学校行事の存在が認められること⁸。教室の前方には「民族・宗教・国王」の写真ないし図が掲げられていること⁹。毎年、新学期の始めに教師に敬意を表する「教師拝礼の日（ワン・ワイ・クルー）」が行われること¹⁰。軍事訓練、愛国心の育成を目的とする「ルークスア（虎の子）」と呼ばれるボーイスカウト、ガールスカウト活動が行われていることなどがある¹¹。これらタイの学校教育の不易からは、依然として、タイの学校教育制度が「民族・宗教・国王」からなる「ラック・タイ」すなわちタイの国民統合の原理を核とする強固な国民教育制度としての機能を有していることが端的に見てとれる。

外来の様々なものを積極的かつ柔軟に取り入れつつも、強固な国民教育体制を有する、すなわちタイ教育の「剛」と「柔」を前提とした時¹²、タイ社会の中で主流とは言えない集団が、自らのアイデンティティや将来をどのように考え、行動しているかは単なる教育動態の把握に留まらず、人権といった観点からも重要である。こうした関心を持つと、これまでのタイの教育に関する研究では、北部の少数民族や南部のイスラーム教徒¹³、ミャンマー、カンボジア、ラオスなどからの越境児童や外国人労働者の子弟¹⁴、そして、小論で取り上げる華僑・華人の教育と、日本語文献に限ってみても、幅広い研究蓄積があることに改めて気づかされる。

とりわけ華僑・華人については「東南アジア各地を旅して強く感じることの一つは、それぞれの国や地域に根を下ろし活躍する華僑・華人のパワーである」¹⁵と指摘される。たとえば、タイの経済という一側面から見て、極端に言えば、タイは華人の国である、と言えなくもない。正確な数値は把握されておらず、また、公表されていないが、タイの華僑・華人口は700万人、全人口の11%というデータもある¹⁶。しかしながら、1938年以降、統制が強化され、華人系学校のほとんどが閉校に追い込まれたことも事実である¹⁷。こうした苦難の歴史を持ちながらも、なお、なぜ華僑・華人が大学を創ることができたか。言い換えれば、タイの強固な国民教育制度の下で、タイに住まう華僑・華人により創られた私立の華僑崇聖大学の存立を維持しているメカニズムとはどのようなものか。これを明らかにすることが小論の目的である。

小論の目的と関心を同じくする先行研究は管見の限り皆無に等しいが、タイの華僑・華人に関する研究や華僑・華人系学校に関する研究は一定の蓄積があり、タイの教育に関する総論的な書物や最近の孔子学院の世界展開に関する研究の中で、コンパクトにまとめられている¹⁸。また、小論の主たる対象である華僑崇聖大学の設置主体である泰国華僑報徳善堂に関する研究も一定の蓄積があり、華僑崇聖大学の概略についても触れられている¹⁹。他方で、華僑崇聖大学を正面から取り上げた研究は頗る少ないが、同大学は、華僑・華人の寄付による社会還元と華人系企業にとっての長期的人材育成戦略であることを指摘した研究がある²⁰。小論では、これら個々の先行研究から得られる断片的な知見と、筆者自身が実施した華僑崇聖大学と華僑報徳善堂の訪問調査から得られた知見を統合し、華僑崇聖大学の存立基盤を明らかにする。

次節では、華僑崇聖大学の創設の経緯、教育プログラム、建学の精神、直面する課題を取り上げる。次々節では、設置者の華僑報徳善堂の各種事業の中での華僑崇聖大学の位置づけ、華僑報徳善堂とタイ王室の関係に焦点を合わせて考察を加える。そして、最後に、各節の考察を踏まえて、同大学の存立基盤についてまとめる。

小論で論じる華僑崇聖大学の存立基盤に関する知見は、たとえば『米中教育交流の軌跡』²¹や『対支文化事業』²²といった教育文化交流ないし教育関係の研究²³、また、一連の「外国人学校」の研究²⁴、の延長線上に位置づけることができよう。実践的には、昨今の「EDU-Port ニッポン（日本型教育の海外展開推進事業）」といった日本の国際教育協力、とくに、アジア教育支援の在り方を考える手がかりを提供することが期待される。なお、一国研究ないし「教

育の地域研究」の立場を取り、タイの主流をフィールドとしてきた筆者にとって²⁵、華僑・華人という国境を越えた存在、一定の存在感はあるものの主流ではない集団をいかに捉えるかは、中国語非識字者ということも重なって困難を極めた。とくに、現地調査で用いた言語や小論に用いた文献、各種資料が、タイ語、日本語に限定されてしまっている点は、小論の限界として予め断っておく。

2. タイ華僑崇聖大学の創設経緯と教育プログラム

上述の問題関心にに基づき、筆者は先行研究を精査して調査依頼状（タイ語）を作成し、現地の調査協力者を通して、訪問調査の許可を得た。その上で、2019年7月22日（月）から7月31日（水）まで、筆者自らがバンコクに赴き、華僑崇聖大学ならびに設置者の華僑報徳善堂を訪問し、聞き取り調査ならびに関連資料の収集を行った。実質的な聞き取り調査は、7月26日（金）午前中に華僑崇聖大学、7月30日（火）の午後に華僑報徳善堂を訪問して行った。また、訪問調査に先だって、現地の調査協力者と打ち合わせを行い半構造化インタビューのための聞き取り調査項目（タイ語）を精査したり、聞き取った内容について現地の調査協力者と入念に確認したりした。なお、実質的に2日ほどの調査にも拘わらず、移動日を含めて10日間要したのは、聞き取り調査の対象者が、それぞれ華僑崇聖大学の副学長、華僑報徳善堂の董事長という要職に就いており、突発的な予定変更の可能性に備えるためである。実際、バンコク到着後に、聞き取り調査の予定変更の申し出があった。

華僑崇聖大学では、創設当初から同大学に勤務している現副学長シリワン・タンタワニット（Siriwan Tantawanich）氏が10時30分から昼食を含めて約3時間対応して下さった。華僑報徳善堂では、現董事長のウィチアン・テッチャパイブーン（Wichian Techapaiboon／鄭偉昌）氏が14時から16時過ぎまで、同善堂の職員3名とともに、約2時間対応して下さった。華僑崇聖大学での聞き取り調査は、シリワン氏が創設経緯、今日の教育プログラムの特色を語り、その語りの合間に、筆者と現地の調査協力者が質問を繰り返すかたちになった。そのため聞き取り調査結果は逐語で文字起こしをして、繰り返して語られた事柄やその際のキーワードに着目しながら分析を行った。華僑報徳善堂でのウィチアン氏への聞き取り調査では、質問項目に対して端的な回答が得られたため逐語で起こすことは行わなかった。以下の小論の論述のうち、とくに参考資料への言及がない場合、筆者自らの聞き取り調査から得られた知見に基づくものである。

(1) 創設経緯

華僑崇聖大学は、タイ国内最大の慈善団体である華僑報徳善堂の「社会奉仕と教育発展」プロジェクトの一環として、1994年3月24日に開学した私立の総合大学である²⁶。そのルーツは、1942年に華僑医院（1938年に創設された助産院）に併設された助産師学校に遡ることができる。当時、病院に通えないタイ人が多かったことから、同善堂は、華僑医院を創設するとともに助産師学校（看護学校）を開設した。これは当時、看護師の養成機関が国立のシリラート医科大学（現マヒドン大学医学部）、ラーマティボディー病院（現マヒドン大学医学部ラーマティボディー校）、そしてチュラーロンコーン大学医学部（看護婦・助産婦学科²⁷）に限られており、看護師や助産師が十分に確保できていなかったことによる。ちなみに、現在40～50歳の年齢層にあるタイ人の多くが、当時、無償で出産できた華僑医院で出産した経験を持つという。

小さな助産院からスタートした華僑医院は、1978年6月19日には22階建て、24時間診療の近代的な総合病院となっている²⁸。1979年5月8日には、ラーマ9世（プーミポン国王）とチュラーボン王女が開院式典に行幸された²⁹。また、1982年12月24日には、先述の助産師学校（看護学校）を母体とする華僑学院（単科大学）の設置が認められている³⁰。同学院は、最初は看護学部のみであったが、その後、社会福祉学部も設置された³¹。

そして、1910年に建立された大峰祖師廟（報徳堂）の80周年にあたる1990年に、国王、王妃の偉大なる慈悲を讃えて、華僑学院を総合大学に発展させることとし、1992年5月11日に大学名「ファチャオ・チャルム・プラギアット」が下賜されたのである³²。大学名は「華僑」を意味する「ファチャオ」、「祝う」を意味する「チャルム」、「国王の栄光」という意味の「プラギアット」からなる。直訳すると「国王の栄光を寿（ことほ）ぐ」となり「華僑崇聖」という華語名と合致するのである。

開学式は、1994年3月24日、ラーマ9世が行幸し執り行われた。当初、ラーマ9世は、1時間程度の滞在予定であったが、一般に見かける高層ビル群のような大学ではなく、約22ヘクタールの広大な敷地に広がるキャンパスや施設設備に関心を持たれ、つぶさに視察された結果、夜10時頃まで滞在されたという。また、同大学は、私立大学で唯一、国王が開学式に訪れた大学であり、その際「よい大学にして欲しい」とのお言葉があったとされる。ちなみに、助産師学校（看護学校）の開校式には、ラーマ8世が訪れており、王室と大学、設置者の善堂の関係は濃いと見てよいであろう。

(2) 教育プログラム

華僑崇聖大学は、2032年までに中国研究、健康科学の拠点になることをヴィジョンとして掲げ、「賢く、道徳的に善い」学生を育てることをミッションとしている。13の学部、大学院（修士課程、博士課程）、国際プログラム、「タイ・中国リーダーズ・プログラム（Laksut Withayakan Phunam Thai-Chin）」を開設し、約8,000人の学生が学ぶ、総合大学である。13学部の構成は、薬学、中国伝統医学、看護、社会福祉、文学、経営、理学・テクノロジー、医療技術、理学療法、公衆・環境衛生、法学、コミュニケーション・アーツ、中国語・文化、である。大学のヴィジョンや、中国伝統医学、中国語・文化学部といった学部構成や、北京大学との共同事業である「タイ・中国リーダーズ・プログラム」³³が設けられていることに端的に示されるように華僑・華人、中国色が強い。無論、孔子学院も設置されている。なお、同大学は、チュラーロンコーン大学やタマサート大学、カセサート大学などの国内トップ大学のような研究型の大学を目指しておらず、学士課程の教育に注力している。

同大学の学部生は、所属学部にとらわれず、中国語（Chinese for Fun）を4年間学び、読む、聞く、話す、書くの四技能の基礎を身に付けることが期待されている。また、中国語・文化学部には、タイ人学生が300～400人ほど学んでおり、1年間、中国語と中国文化を学ぶために、中国へ留学する。留学中は、現地でホームステイをしたり、大学内の寮に滞在したりすることになっている。中国の交流先の大学との連絡・連携は、華僑崇聖大学で学んだ中国人留学生を職員として採用することにより、円滑に進めることができているという。中国伝統医学部と中国語・文化学部では、中国から1～3年間、招聘した中国人の教員も指導にあっている。

道徳的に善い学生を育てることに関わって、同大学では、仏教、道教、儒教といった複数の宗教を大切にしており、それぞれの宗教に関する課外活動が行われている。たとえば、冒頭で紹介した「教師拝礼の日」というタイの行事も実施するとともに、孔子の生誕を祝ったり、行事によっては中国寺院から僧侶を招いたりするという。また、その際、6つの徳目（勤勉、忍耐、節約、慈悲、誠実、恩義）を大切にしている。

教育プログラムの中で、中国的な要素とタイ的な要素が、どの程度の割合であるかを判断することは難しいが、他の一般大学に比べて、中国的な要素が多いことは明らかである。

(3) 建学の精神—「社会奉仕のための学び」—

図1は、華僑崇聖大学の学章である。学章の中心には「善」という文字がある。これは、設置者の華僑報徳善堂のロゴマークにも用いられている。この「善」は、タイ語では「シアン（siang）」と読み、美德、誠実さ、といった意味がある。「善」を中心として、その周り

に、タイ語、華語、英語で、大学名が記載されている。そして、学章の下に、タイ語で建学の精神が記されている。タイ語で「リアン・ルー・プア・ラップ・チャーイ・サンコム (rian ru phua rap chai sangkhom)」と読む。同大学の図書館の壁には、この建学の精神が掲げられており、タイ語、華語（學成服務社會）、英語（Acquire Knowledge to Serve Society）の三カ国語で記されていた。

この「社会奉仕のための学び」という建学の精神は、設置者の華僑報徳善堂が「タイ社会のニーズへの応答 (top sanong phaendin thai)」を大切にしていることと共通している。高等教育機会の拡充、故郷の中国文化の継承といったねらいもあったと説明されるが、聞き取り調査の中で繰り返されたことは「タイという国への感謝 (katanyu to phaen din thai)」であった。

筆者は、建学の精神にある奉仕の対象としての「社会」とは、タイ社会全体を指すか、それとも、たとえば故郷の中国を含む、よりグローバルな意味での社会を指すかと尋ねたところ「タイ社会全体というのは大きすぎる。大学が所在するサムットプラカーン県で、関係者で議論した結果、ひとまず大学の周辺の地域」ということになったとの回答を得た。また、これに関連する具体的な活動として、主に週末に「コミュニティ・サービス」として、クローンダーン (Khlong Dan) 地域のプラー・サリット (和名は、スネーキング・グラミー) という魚の養殖、商品化、マーケティングを支援しているということであった。

(4) 直面する課題

聞き取り調査の終盤では、華僑崇聖大学が直面している課題について尋ねた。一つは、少子化の影響から学生数が減少傾向にあること。もう一つは、大学教員による一方通行の講義といった伝統的な教育形態から、学生が主体的に学びを深めるような教育形態への改善とのことであった。

学生数の減少は、授業料収入の減少と直結しており、大学運営において喫緊の課題である。タイの合計特殊出生率 (15~49 歳までの女性の年齢別出生率の合計) を見ると、1.5 (2018 年) であり、今後、ますます少子高齢化が進むことが予想されている³⁴。しかしながら、華僑崇聖大学の場合は、他の私立大学とは異なり、華僑報徳善堂は「私立高等教育法」第 66 条第 2 項が定める収益の 30% を設置者に納めることを課しておらず³⁵、不足する場合は、華僑報徳善堂が補っている。さらに、施設設備の拡充など華僑崇聖大学が必要とすることは、吟味した上で、全面的にサポートする姿勢を見せているとのことであった。設置者の華僑報徳善堂にとって、華僑崇聖大学の学生数が減少し、赤字経営になろうとも廃止するという選択肢はないようである。

3. 華僑報徳善堂から見た華僑崇聖大学

前節では、華僑崇聖大学のウェブサイト等に掲載されている情報ならびに副学長への聞き取り調査から得られた知見を手がかりに、創設経緯、教育プログラムの全体像、建学の精神、そして直面する課題について論じてきた。本節では、設置者の華僑報徳善堂の中で、華僑崇聖大学がどのように位置づいているか、小論の冒頭で紹介した玉置充子氏による一連の華僑報徳善堂に関する研究ならびに董事長のウィチアン氏への筆者自身による聞き取り調査を手がかりに見てみよう。



เรียนรู้เพื่อรับใช้สังคม

図 1 華僑崇聖大学の学章
出典：同大学中国伝統医学部 Facebook サイト

(1) 華僑報徳善堂の発展史における華僑崇聖大学の位置

華僑報徳善堂は1910年に、バンコクの有力華人12名が発起人となって、現在地に大峰祖師廟（報徳堂）が建立されたところにその起源がある³⁶。祀られている大峰祖師は、宋大峰祖師（Dai Hong Kong）と呼ばれる仏教僧であるが、もともとは地方公務員であり、困難な状況にある人々を助けたり、橋を架けたりしていたとされる。当時のバンコクでは疫病が流行っており、報徳堂は「恤死（じゅつし）」と呼ばれる無縁の死者の遺体回収、納棺、埋葬を行っていた³⁷。右の写真（図2）は、遺体回収に用いていた荷車である。その後、1930年代に入り、先述の助産院（後の華僑医院）が開設されたり、1941年の太平洋戦争の影響を受けてレスキュー活動が始められたりした³⁸。1930年代から1990年代に至る60年余りの間は、小論の冒頭で紹介した通り、ナショナリズムの高まりや、親米反共政策の影響を受けて、華僑・華人にとっては厳しい時代であった。とはいえ、1970年代の学生運動を契機とする民主的國家を目指す動きを背景として、1970年代末に華僑医院の拡張事業が行われたり、1994年に小論のターゲットである華僑崇聖大学が設立されたりしている。



図2 遺体回収に用いていた荷車
出典：華僑報徳善堂文物史館にて
筆者撮影

1970年代以降の華僑報徳善堂の各種事業を薫事長として率いたのは、現薫事長ウィチアン氏の父、ウテーン・テッチャパイブーン（Uthen Techapaiboon／鄭午樓）氏であった。ウテーン氏は、バンコクメトロポリタン銀行の創設者であり、潮州会館を創設した鄭子彬（テー・ツーピン）の長男である³⁹。ウテーン氏は、大学創設にあたって、自らも寄付するとともに、寄付金集めに奔走したとされる。

以上の恤死に始まり、レスキュー活動、助産院、病院の設置、大学の設置といった華僑報徳善堂の一連の事業は「人を助ける」「人を守る」そして「人を育てる」という、人が生まれてから死ぬまでを華僑報徳善堂はサポートするという今日のモットーになっている。とりわけ、華僑崇聖大学の創設は、死者を弔い、被災者を救い、病人を助けるという現在や過去の人に向き合うことに加えて、人材の育成という未来に向き合うものとして位置づけることができよう。

(2) 華僑報徳善堂と王室の関係

先述した通り、華僑崇聖大学の開学式や、華僑医院の新設された病棟の開院式にラーマ9世が行幸されている。筆者は、現薫事長のウィチアン氏に王室との関係、すなわちなぜ華僑・華人が創った私立大学の開学式に国王が訪れたかを単刀直入に問うてみた。まず、ウィチアン氏は「ラーマ9世は、華僑報徳善堂は真にタイ社会を助けていることをよくご存じである」と一言。続けて「華僑報徳善堂は非営利の私的な組織である。人が生まれてから死ぬまで世話をする団体であり、国籍、性別、宗教を問わず助けている。病院、大学といった実績もある。タイ国内には多くの類似の財団があるが（同席していた職員の補足説明によれば420団体）、真に支援している団体は多くはない」と語った。また、ラーマ9世のみならず、ラーマ9世の母や姉も行幸されたことがあるという。1946年には、ラーマ8世、後のラーマ9世が揃って、華僑報徳善堂、華僑医院に行幸されたことがあり、1,000バーツ寄付されている⁴⁰。さらに時代を遡ると、ラーマ6世の治世（在位1910～1925年）にも2,000バーツの寄付を得ている⁴¹。ちなみに、華僑報徳善堂の100周年を記念して編纂された『百年創堂 世紀善積 華僑報徳善堂100周年記念特刊』の冒頭には、タイ語と華語でそれぞれ6頁にわたって、写

真入りで、王族の行幸が記録されている⁴²。これによると先に挙げた3つを含めて11の行幸があったことがわかる。華僑報徳善堂の種々の社会奉仕活動が、タイ王室の高い評価を得ていることの証左である。

ウィチアン氏は、なぜ華僑・華人が多額の寄付をして大学を創ったかを語るの中で、華僑・華人は、タイという国に受け入れてもらい、財を成すことができた。ゆえに「タイという国の恩義に報いる (top thaen bunkhun phaendin thai) のだ」と語った。これは、先述したシリワン氏の聞き取りの中でも「タイ社会のニーズへの応答」であったり「タイ社会への恩義、感謝」という言葉が見られたりしたことと共通している。一定期間、弾圧された過去はあるものの、タイという国が、自分たち(華僑・華人)を受け入れて生計を立てさせてくれたことを恩に着て、華僑・華人は生きている、生かされている、のである。

4. おわりに—存立基盤としての「ブンクン」—

華僑崇聖大学が如何にして存立し得ているか、という小論の問いに対する答えは、聞き取り調査から得られたタイという国や社会に対する恩義、感謝、すなわち「ブンクン(bunkhun)」に集約できるように思われる。ブンクンとは「誰かが純粋な親切心と誠実さによって必要とされる助けと恩恵をほかの人に施し、他方、後者が受けた恩恵を忘れずいつまでもその親切心に報いる、そうした恩を与える人と受ける人の間の心理的な絆」⁴³であるとされる。小論のコンテクストに引きつけると、タイという国、とくに、国王、王室は、貧しかった華僑・華人を自国に住まわせ、生計を立てさせてくれた。ゆえに、華僑・華人はその恩恵を忘れずいつまでもその親切心に報いる、ということになる。つまり、この華僑・華人と王室の心理的な絆こそが、強固な国民教育制度の下であっても、華僑・華人による中華色の強い大学の存立を可能としていると考えられるのである。「タイの善堂は、…(中略)…タイ社会の中で確固たる地位を築き、タイ社会にとって『われわれの団体』となった」⁴⁴との玉置充子氏の指摘とも重なるが、華僑崇聖大学は、タイの大学として、これからの少子高齢社会の中でも存続しうるし、存続しなければならないのである。

付記

本稿は、JSPS 科研費 JP 18K02430 の助成を受けている。現地調査では、パッタニダ・パントウマセン氏(元タイ教育省教育審議会事務局国際教育センター長)の助言、協力を得た。筆者の訪問を歓迎して下さった華僑崇聖大学副学長シリワン・タンタワニット(Siriwan Tantawanich)氏、泰国華僑報徳善堂の董事長ウィチアン・テッチャパイブーン(Wichian Techapaiboon)氏ならびに職員の方に感謝申し上げる。

注

¹ モリソン、チャールズ E. (渋沢雅英 訳) 『東南アジア五つの国—その生存戦略—』サイマル出版会、1981年、1～51頁。

² Watson, Keith. “3. Looking west and east: Thailand’s academic development,” in Altbach, Philip G. and Selvaratnam, Viswanathan. ed. *From Dependence to Autonomy: The Development of Asian Universities*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 1989, p. 64. (キース・ワトソン(大塚豊訳)「2 タイ大学の発展—西洋モデルと伝統モデルの融合—」馬越徹、大塚豊監訳『アジアの大学—従属から自立へ—』玉川大学出版部、1993年、92～93頁)

³ 学習内容グループとは、日本の教科に相当するものと捉えてよい。ただし、タイの基礎教育課程では、教科横断的な教授学習が目指されていることから、教科を意味する wicha ではな

- く、グループを意味する Klum と学習内容を意味する sara kanrianru を組み合わせた「Klum sara kanrianru」が用いられている。鈴木康郎、森下稔、カンピラパーブ・スネート「タイにおける基礎教育改革の理念とその展開」『比較教育学研究』第30号、2004年、157頁。
- 4 拙著「タイ」大塚豊監修、牧貴愛編著『海外教育情報シリーズ 第2巻 東南アジア』一藝社、2020年刊行予定。
- 5 拙著「第2章 タイの教師教育改革—混迷する政局下の革新的な取り組み—」興津妙子・川口純編著『教員政策と国際協力—未来を拓く教育をすべての子どもに—』明石書店、2018年、80～83頁。
- 6 下田旭美「タイにおける高専教育モデルの展開—パイロット校を訪問して—」『広島商船高等専門学校紀要』42巻、2020年3月、印刷中。
- 7 拙著、前掲書、2020年刊行予定。
- 8 野津隆志『国民の形成—タイ東北小学校における国民文化形成のエスノグラフィー—』明石書店、2005年。
- 9 村田翼夫「第1章 東南アジア諸国における共通の教育 第1節 共通の教育」村田翼夫編著『東南アジアの教育モデル構築—南南教育協力への適用—』学術研究出版、2018年、2～3頁。
- 10 拙著「第9章 タイ—「聖職者的教師」と「専門職的教師」の調和を目指す国—」小川佳万・服部美奈編著『アジアの教員—変貌する役割と専門職への挑戦—』ジアース教育新社、2012年、216頁。
- 11 村田翼夫「第2章 タイの学校におけるボーイスカウト活動」村田翼夫編著、前掲書、28～29頁。
- 12 「剛」と「柔」は、赤木攻『復刻版 タイの政治文化—剛と柔—』エヌ・エヌ・エー、2008年にヒントを得た。
- 13 渋谷恵・鈴木康郎「二章 タイ—国民教育の展開と少数民族の対応—」天野正治・村田翼夫編著『多文化共生社会の教育』玉川大学出版部、2001年、275～292頁。
- 14 野津隆志『タイにおける外国人児童の教育と人権—グローバル教育支援ネットワークの課題—』ブックウェイ、2014年。
- 15 大塚豊「はしがき」『アジアにおける華人ディアスポラの教育への関与に関する国際比較研究 平成20～23年度科学研究費補助金 基盤研究(B) 研究成果報告書 研究代表者 大塚豊』広島大学大学院教育学研究科比較国際教育学研究室、2011年、1頁。
- 16 庄国土(玉置充子 訳)「東南アジアにおける華僑・華人人口の推計(特集 中国の将来)」『海外事情』平成21(2009)年11月号、拓殖大学海外事情研究所、38～42頁。
- 17 村田翼夫『タイにおける教育発展—国民統合・文化・教育協力—』東信堂、2007年。大塚豊「第3章 アジア諸国における漢語教育と華僑・華人の民族アイデンティティ—カンボジア、タイ、インドネシア、ベトナム調査から—」『中国の対外言語教育政策に関する研究—孔子学院の世界展開を中心に— 平成26～28年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書 研究代表者 大塚豊』福山大学大学教育センター、2017年、40頁。
- 18 同上。
- 19 玉置充子「第七章 タイ現代史の中の潮州系善堂—華僑報徳善堂の発展と適応—」志賀市子編『潮州人—華人移民のエスニシティと文化をめぐる歴史人類学—』風響社、2018年、285～324頁。玉置充子「第六章 中国と東南アジアの華人社会—民間信仰と結びついた慈善団体『善堂』—」櫻井義秀・濱田陽編著『アジアの宗教とソーシャル・キャピタル』明石書店、2012年、196～219頁。玉置充子「第5章 東南アジアの華人コミュニティ—タイ・シンガポールにおける潮州系華人慈善団体『善堂』の発展と機能—」岩崎育夫編『新世代の東南アジア—政治・経済・社会の課題と新方向—』成文堂、2007年、181～217頁。
- 20 中山三照「タイにおける潮州系華人経営者の寄付金による華僑崇聖大学設立」『日本地域政策学会』Vol.5、2007年、137～143頁。
- 21 阿部洋編『米中教育交流の軌跡—国際文化協力の歴史的教訓—』霞山会、1985年。
- 22 阿部洋『「対支文化事業」の研究—戦前期日中教育文化交流の展開と挫折—』汲古書院、2004年。
- 23 石附実『世界と出会う日本の教育』教育開発研究所、1992年。

- 24 福田誠治・末藤美津子編『世界の外国人学校』東信堂、2005年。『多文化化する社会における外国人学校の位置取りのポリティクスに関する国際比較研究 平成17～19年度 科学研究費補助金 基盤研究(B) 研究成果報告書 研究代表者 服部美奈』名古屋大学大学院教育発達科学研究科、2008年。
- 25 拙稿「一国研究または『教育の地域研究』における研究枠組みの構築—タイ教師教育研究を振り返って—(特集 方法論を編みなおす)」『比較教育学研究』第57号、日本比較教育学会、2018年、4～12頁。
- 26 華僑崇聖大学ウェブサイト(タイ語版) <https://www.hcu.ac.th/about> (2020年1月18日閲覧)
- 27 石井米雄「<附録>資料(1)『チュラロンコン大学略史』」『国立教育研究所紀要(高等教育総合研究・比較研究部門研究報告・6-アジア諸国の高等教育に関する研究報告)』1975年、183～185頁。
- 28 玉置充子、前掲書、2018年、309頁。なお、華僑医院のウェブサイト(<http://www.hc-hospital.com/about-huachiew.html> 2020年1月11日閲覧)によれば1978年6月19日から医療サービスの提供を始めたとある。
- 29 華僑医院ウェブサイト <http://www.hc-hospital.com/about-huachiew.html> (2020年1月11日閲覧)
- 30 Prakat Thabuang Mahawithayalai Ruang Kanchattan Sathaban Udomsueksa Ekachon, *Rachakitchanubeksa*, Lem 99, Tonthi 3, 12 Mokarakhom, 2525, na 103. (「大学庁告示 私立大学の設置について」『官報』99巻3号、1982年1月12日、103頁)
- 31 玉置充子、前掲書、2018年、309頁。
- 32 華僑崇聖大学ウェブサイト(タイ語版) <https://www.hcu.ac.th/about> (2020年1月18日閲覧)
- 33 将来、タイと中国とのビジネスの架け橋になりうる中核人材の育成を目的としたプログラムであり、主立った出願資格は、45歳以上65歳未満で、タイと中国の貿易などに従事していることである。3～4か月間の短期プログラムであり、2019年7月の時点で、2期生まで修了している。ちなみに、個々の修了生の写真、ニックネーム、連絡先等が記載された名簿が作成されており、第1期生の名簿には70名が掲載されている。Sathaban Withiyakan Phunam Thai-Chin (Thai-Chinese Leadership Institute/泰中文化経済学院) ウェブサイト <https://www.hcu.ac.th/tcl/dictionary.php> (2020年1月18日閲覧)
- 34 World Development Indicators database https://databank.worldbank.org/views/reports/reportwidget.aspx?Report_Name=CountryProfile&Id=b450fd57&tbar=y&dd=y&inf=n&zm=n&country=THA (2020年1月18日閲覧)
- 35 Prarachabanyat Sathaban Udomsueksa Ekachon Pho. So. 2546, *Rachakitchanubeksa*, Lem 120, Tonthi 107 Ko, 30 Tulakhom, 2546, na 19. (「仏暦2546(西暦2003)年 私立高等教育法」『官報』120巻107号、ゴ一、2003年10月30日、19頁)
- 36 玉置充子、前掲書、2012年、210頁。
- 37 玉置充子、前掲書、2018年、289頁。
- 38 玉置充子、前掲書、2012年、210頁。
- 39 末廣昭、南原真『タイの財団—ファミリービジネスと経営改革—』同文館、1991年、7～8頁。エヌ・エヌ・エー、NNA Thailand、The Daily NNA タイ支社編集部『タイの華人財閥57家—タイを創った男達・女達—』エヌ・エヌ・エー、2003年、214～220頁。
- 40 玉置充子、前掲書、2018年、302頁。
- 41 華僑報徳善堂『百年創堂 世紀善積 華僑報徳善堂100周年記念特刊』(刊行年月日、頁数未記載)。タイ語、中国語併記。中山三照、前掲論文、139頁。
- 42 華僑報徳善堂、前掲書。
- 43 ホームズ・ヘンリー、スチャーター・タントンタウィー(末廣昭 訳・解説)『タイ人と働く—ヒエラルキー的社会と気配りの世界—』めこん、2000年、63、66頁。
- 44 玉置充子、前掲書、2018年、317頁。